

蝸螂の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第七回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

2011年の今、1990年夏の日誌を読んで思うことは、我ながら元気だの一言である。よく動いている。一つ一つの仕事の質や見解まではどうこういえないが、とにかく楽しそう。基本的には今も毎日楽しいのだが、あの頃は働き盛り、元気だったなあと思う。そしてそう思える昔が、文字記録に残っているのを幸運だと思った。

私はワープロ、PCが登場するまで、書くことが苦痛だった。文章を書くのが苦手だったわけではない。清書が嫌いだった。それが理由で原稿を頼まれても、適当なところで妥協していた。初めて分担執筆した本の原稿（当時はまだ原稿用紙に清書して提出だった）も、最終的には「これ以上推敲すると、又清書し直さなければならぬから面倒だ！」が理由で、読み返すのを止めた。だから本になってから、いろいろ思うところがあった。

PCが普及して、話すようなペースで書けるようになった実感があり、書きたいところから書いて、文節毎に前後入れ替えが可能な編集機能を駆使できるようになったのは私にとって大変革だった。書くことが楽しくなった。

そしてもう一つ、時代は多少前後するが、書くことをそそのかしてくれた二人の編集者との偶然の遭遇が重なる。

一人目はなんでもなし話で、先方は心当たりもないだろう。定期購読していた月刊誌「話の特集」（随分前に休刊になった）と共に、編集長・矢崎泰久氏をクセのある興味深い人だと思って見続けていた。愛読者カードも時々書き送ったりしていた。その一回が、イラスト付きの描き文字のまま、読者の声欄に掲載された。嬉しかった。そんなことを期待していたわけではなかったのだから、本当にびっくりしたのだ。

そのしばらく後の事だが、筑摩書房から独立した編集者・原田奈翁雄氏の創業した径（こみち）書房。ここから創刊された「いま人間として」を創刊準備号から愛読していた。そしてゼロ号、一号と愛読者カードを書き送っていた。そんなある日、径書房編集部と書かれた封書が届いた。出版案内のDMかと思って開封してみると、「いま人間として」第3号の特集「仲間」をテーマの原稿を書かないかという誘いだった。びっくりして大喜びした。

執筆依頼など受けたことのない、地方公務員だった。文章はたくさん書いていたが、商業誌からの依頼原稿など、どう書けばいいのかわからないと戸惑いながらも、とにかく嬉しかった。そして、漫画家仲間「ぼむ」の連中との同人誌作りのドキュメンタリーをマンガも含めて（これは他の人と違った強みだった）書いた。しかし、「こんな生真面目でかたい雑誌、誰が購読しているのだろうか？」と案じていた通り、10号余りで休刊になった。

この二つの出来事が私に、ものを書くことを後押ししてくれた。プロの編集者に選んでもらえたという一点が、その後の行動をどれだけ支えてくれたことか。チャンスをくれる人の有り難さは今も忘れない。

1990年7月

7/3 TUE 京都市南保健所の保健婦さんを中心にした事例検討会に呼ばれて家族療法の話をした。世の中には誰が悪いか、何が悪いのかと犯人や原因を探るのが、好きで好きで仕方ない人が多い。そしてその人達は押し並べて、問題解決には力がない。

原則的なこの姿勢は、当時も今もそう変化はない。我ながら、相変わらずだと感心する。ただ、こう言っているからと言って原因がないなどと主張しているわけではない。

原因究明は問題解決や軽減に、必ずしも役に立つとは限らないと言っている。この発想が持てたことが、私の人生の後半の大きな分かれ道になったと思う。

7/4 WED わが児童相談所に新人として配属されてきた一時保護所指導員のK君の研修で職場の四方山斬をした。

K君の新採研修に職場は大いに張り切った。外部からの視察や研修依頼にもそれなりに力を入れていたから、内部スタッフの新採研修となればもっと力も入った。しかしその内、空気が抜けるようにモチベーションが下がっていった。彼は国家公務員の試験を受け続けていて、現在は法務省関係の職場を摸索する間の腰掛けらしいということが分かってきたからだ。

進路選択は基本的に個人の自由だ。他人が勝手な思いを押しつけるものではないことは分かっていた。しかし我々がトーンダウンしていったのも仕方なからう。

彼は結局二年目も居たのだったと記憶し

ているが、相変わらず受験生で腰掛け職員。そこへの対応エネルギーが空しくなってくのは避けられなかった。

7/6-7 FRI-SAT 三年目を迎えた、児童福祉施設中堅職員研修の初回。新しい参加者七人と初顔合わせ。プログラム講師は松井洋子さん(ボディーワーク・からころ代表)。参加者それぞれが非常にしなやかで、初々しいのに驚く。

継続してきたことが定着して、その影響が初参加の人達の振る舞いの中に認められることが嬉しい。

施設職員のための通年連続研修会が順調に継続されていった。こういう蓄積が、10年後の場や施設を形作る。



そんなことは分かっていそうなものだが、しばしば先行する物事は、後発のアイデアや、声の大きなものの影響で簡単に終結を迎える。そして又、大した工夫もない新しいだけの事業に書き換えられていく。

その結果が現状であることを、経験の短いスタッフは知ることすら出来ない。「継続」は侮れない大きなテーマなのだが、そんな経験も与えられない若い人達は、現状を防衛的に語る以外、自己肯定の手だてがない。

でもそれは、あなたのせいではなく、システムを継続的に維持管理する責任を持った人間に知恵が足りないせいなのだ。だから管理者やトップの人選には注意がいる。事なかれ主義の臆病者をトップに頂くと、スタッフは砂をかむような現状砂漠に向かって働けと追いたてられることになる。そして失敗が起きると、自己責任にされる。

必ず上手くいく方法など誰にも分からないのだから、受け継がれている先人の知恵に学ぶ程度の謙虚さはあって良い。新しいモノが素晴らしいモノだなんて、子どもっぽい好奇心しか満たさない理屈だ。

7/9 MON 月例の「継続中の全ケース進行状況報告」を第一議題にした課会議。その後、膠着状態のいくつかケースの打開案を担当と話し合った。午後はヤセ症の子との面接。

コンピュータが導入され、この20年の間に職場環境や業務管理環境は大きく変化した。業務の進行状況管理強化によるメリット、デメリットは両方あるのが当然だ。PCの導入、データの共有化も一面だけでは語れない。「進行管理」自体が複雑さを持ったテーマなのだ。

そう考えると、今は管理と記録が徹底して追求される時代になったのかもしれない。当時は、ケース進行管理が難しい故の問題を抱えていた時代だった。

各児童福祉司がどんな継続ケースを、どれくらい持っているのか。管理職がカルテに目を通していたら分かるようで、実際はなかなか正確なところは把握できなかった。(担当者が記録を書く時間が限られ、カルテの回ってくるのが遅い)。その結果、年度末や、担当者の異動がきっかけで、「そんな

ケースがあったの！」なんてことが実際にあった。

それをなくそうと、継続ケースの月例進行管理を提案して開始していた。指導継続ケースを一覧表にして、担当順に、全ケースの一ヶ月の様子を口頭で報告して貰った。その結果、長期にほったらかしになってしまうケースがなくなっただけではなく、手つかずのまま指導継続中だったケースが、コンタクトと共に終結になっていって少し身軽にもなった。

7/10 TUE 今年の新任児相職員研修を福知山児相で行った。「職場のチームワーク」をテーマに話すよう依頼されて出かけた。その後、特急で戻って職場に顔を出して、雑用を片付けてからKISWEC(京都国際社会福祉センター)の家族療法訓練の当番日なので出かけた。

この夜、出かけた家族療法訓練で、私はこんな経験をしていた。

思春期病棟のある病院の院長が訓練受講に来ていて、セラピストをする日だった。今日来てくれたボランティア家族(研修のために、一般の家族をお願いしている)は、成人した息子、娘とその両親の四大家族。元国鉄マンの父親は、広島に原爆の投下された直後、蒸気機関車を運転して広島市内を走ったそうだ。



「初めてそんな話聞いた！」と成人した息子が驚きと共に呟いていたのが印象的だった。

今、振り返ってみると、一日でいろんなレベルの出来事に対応している。今と過去と、未来のためにが交錯している。その一つずつにしっかりアクセスしておくことが、それぞれのその後を作る。

これらのことを思い出すと、あの時の芽が、何として実っていったのかも分かる。職場の応援もあって受講した訓練だったから、意識して成果を、児相に還元しようとしていた。

それが三年目には思いがけず家族療法訓練スタッフとして実施する側になることになっていた。自分としては、貰ったモノは返すという意識で、とくに問題ない話だった。

しかし地方公務員法がからんで時々、経過や様子の分からない管理職から、「兼業の禁止」が注意されたりした。

働かない人には甘いのに、人の二倍働いている人間にうるさいことを言う組織を、私は納得していなかった。そこから職場に還元されているものの存在に敬意が足りないとさえ考えていた。

公務員組織だけで世の中が構成されているわけではない。外の世界の空気も知恵も導入しなければ、職場が職員互助組織化してしまうと確信していた。この批判が世間の言う「親方日の丸」という言い方だった。

そんな、生ぬるい仕事をしている気はなかったのも、外に向けではなく、組織内部にも自分の姿勢ははっきりさせていた。

今、児童相談所の内部にこんな乱暴者の力はなく、市民社会に対して防衛的になりがちな状況と、起きてしまった事への対策

が溢れている。これは組織内に未来に向けた英知を醸成してこなかった組織管理者の責任だろう。

数年後、私が京都府を退職してから、この研修に同僚の早樫一男君（現・同志社大学教員）が関わっていることについて、兼業を禁ずる条項に反しているとかの指摘があり、彼は人事記録上の処分をされた。実害のあるものではなかったようだが、なんと短絡的で、社会システム全体を見ない反応だろうとあきれた。（そして、それなら私がいるときに言えば良かったじゃないか！と思った）

私たちが最初に受講したときも、組織の一員でありつつ、全国の児相や周辺機関職員の研修の場の担当をすることにサポートだった京都府は、どんどん縮んでいった。そして処分といえば後年、児童虐待死事件が京都児相管内で起きてしまった時、頑張っていたけれども起きてしまった地域の不幸について、私のよく知る熱心な担当児童福祉司を処分した。

7/13 FRI 新体制になって初めての三児相課長・係長会議。養護ケースの京都府的分析をし始めている。数字の奥に少しずつ、いろいろな意味がちらついているのが見える。

この段階ではまだ、児童虐待増加の予感程度だったと思う。「養護問題の質が変化してきた」なんて言っていたのを思い出す。そして大阪市に代表される都市型の養護問題と、京都府とは同じではないと話し合った。「やっぱり京都府は田舎だよなあ」とネガティブではなく話していた。

この後、どんどん露出の多くなる児童虐待の大阪市方式？や、愛知県の論調と、京都は一線を画していると思っていた。

しかしこの潮流は全国を席卷し、児童虐待問題対応のスタイルの本流に飲み込まれていった。もはや小さな実践からの提言など許されない、全国的で大学アカデミズムに後押しされた主張が「こども虐待」問題のトレンドを形成していった。こういう事態はいつも、牽引する数名の学者と、キャッチーな理論が担っていた。

そして二十年、誰も彼もがヘトヘトの現状を形成して今に至る。誰が悪いのでもないが、結果が良くはない。通告は増え続け、トップランナーは消耗しきっているし、後に続いた者はどんどん脱落し続けている。

今更引けない人々の献身によって支えられている日本の子ども虐待問題。今後どう収める計画なのか、私には見えない。

経験的に言うなら、社会が飽和し、金回りが悪くなったのを理由に、今から出てくる他の理屈や現象に飛びついて、子ども虐待ブームが去るかたちで放り出されて沈静化するのだろう。

その時にはおそらく通報数ではなく、子ども虐待死の実数が語られることだろう。そして社会はもっと厳しい別の課題に直面して、大騒ぎしていることだろう



「一人の子の虐待死に学ぶこと」は科学だが、「一人も虐待死させてはならない」はスローガンだ。それを一緒に語ってはならないのではないかと思う。

7/14-15 SAT-SUN 栃木県の社会福祉教育センターから研修の依頼をされて来週はじめに行くことになった。すると「私も行こうかな」と嫁さんが言わせて、前々日の土曜日から出発することにした。初日は奥日光・中禅寺湖の更に奥、湯の湖畔のホテルで一泊。海拔1500メートルの高原は肌寒かった。滋賀を朝八時に出て、着いたのは午後四時半。次の日は滝巡りをしながら日光に下って宇都宮に出た。ちょっと有名なレストランで、なかなか珍しいフランス料理を食べた。

各都道府県に「社会福祉研修センター」のような組織が活発に機能していた時代があった。

私は府の社会福祉研修所で、田中昌人氏の発達保障理論に基づく講義や実践のドキュメンタリーフィルムを見せられたりした記憶がある。そういうことを各府県で実践していたのだろう。職員の養成に力を入れていた時代だ。

訳も分からず多忙ではなく、短期で人が入れ替わってしまうこともなかった。先輩はうっとうしくも有り難かったし、研修機会も内外に豊富だった。

組織内自治研活動や全国の児童相談所問題研究セミナー（後年、児童相談研究セミナーに改称）など、業務を社会科学的に検証したり、見直したりする機会がいくらかもあった。積極的にその中に身を置くことで、いろんな事を学んだ。

7/20 FRI 朝、所長・次長との定例の週間打ち合わせのあと、社会福祉実習の大学生7人に非行問題について、一時間半ほど話した。午後、西川さん(隣接する知的障害者更生相談所所長補佐)に庁舎使用問題で意見を求められた。その後、定期的に通って来る子どもと続けて二人会った。二人目の子は、元気が出てきつつある不登校の中三女子で、彼女の希望でこの夏、北海道の酪農農家へ体験実習的に出かけることを考えていて、その計画を練った。

その後、息子達に暴力を振われている父親との川畑君の夕刻からの面接を少し見て、編集者講座に行った。泉麻人が講師。エッセイが宿題で出ていて、その講評をした。「このまま雑誌に載っていてもおかしくない完成されたものがあつた」と前置きして、僕のもものが読まれた。子どもの頃にはこういう経験が全くなかったので嬉しくなった。いくつになっても誉められると嬉しいものだと思えて実感する。

この日のことは、とても鮮明に思い出せる。所長、次長とはウイークリーの定例会を持っていた。気が合う上司ばかりではなかったが、意思疎通機会は確保しておくことで、不要なトラブルは防げていた。

毎年のことだったが、実習生への対応は出来るだけ丁寧にと考えて、手厚いプログラムを実施し、実習ノートへの記述もおおざなりにならないよう気をつけていた。しかし、そんな思いは、それほど伝わったわけではなかった。自分の若い頃を思い出せばやむを得ないかと思うが、若者は無神経で無頓着だった。

精更相(知更相)との庁舎共同使用問題上のトラブルが前任者の代から混迷したまま続いていた。隣接地に建てられた新しい

庁舎の一階に、児相のプレイルームが新設され、二階(事務所)三階(面接ゾーン)に知更相が入っていた。この状況は、庁舎管理問題でしばしば両相談所がぶつかる事になった。

西川さんとは心理職の先輩・後輩関係ということもあり、ここで解決しておかないと、ずっと引きずる事になると思っていた。結局、大幅な譲歩も含めて、未来に向けて、積み残し課題を放置しないという一点で合意した。

一つの建物は一つの公所であると認識し、プレイルームを放棄した。そして知更相は事務所を一階に降ろすことになった。元々の経過を考えると、それは不当な譲歩だと主張する人もいた。

この数年後、まさか自分が西川さんのポジションに異動になるとは考えもしなかった。そしてあらためて、自分も一緒になって片付けておけたことが幸運だと思った。情けは人のためならず・・・を実感した出来事だった。

川畑君の面接していたこのお父さんの家族(夫婦)物語は哀れなところのある話だった。ずっと後に、木陰の物語の一作として描いた。



夜、編集者講座に出かけて、コラムニスト泉麻人氏の話聞いた。そこで前回の課

題への講評を聞いたのだった。この頃から、自分の書いているものへの自信が少し出てきていたのだと思う。

7/21-22 SAT-SUN 今秋開く全国児童相談所問題研究セミナーの母体である「全国連絡会」の会議を京都で開催した。関東・中部からたくさん全国運営委員の人達が来てくれた。各府県の今日の状況をつぶさに知る事ができて、毎年のことながらこの集まりは面白かった。プログラムの検討もしてもらった。

日曜の正午に終わって、映画を観る人や、ぶらぶらするという人達と別れて、帰宅して読売ユーモア広告大賞の応募作品を二枚描いた。月末締め切りで、今日描かないと不参加になるしかなかったのだ。

この時に描いて、入賞して貰ったメダルがこれだ。私は賞や当選等というものに、ほとんど縁のない人生を送ってきたが、この時期だけ、いくつかの幸運が届いていた。

漫画家としては合計3回、それなりの受賞をしたが、2回はこの年と翌年の連続だった。翌年は、授賞式にも来るようにと主催者（読売新聞社）から強く招待されて、大手町の読売新聞社屋に出かけ、パーティ会場で漫画界、デザイン界の重鎮達を眺めていた。



7/25 WED 年二回、府県持ち回りで開催される近畿児童相談所職員研修会が和歌山であった。終了後に、心理判定員協議会の近畿ブロックの幹事の引き継ぎを行わなければならなかったのですが、気は進まなかったが参加した。中味は期待に違わずしょうがないものだった。しかし後の心理判定員の集まりは、短時間ながら面白かった。別れ難い人があったので、駅前の喫茶店で、八人ほどで続きの話をした。

この頃、まだ近畿の心理職連中が個人的に親しいということにはなかった。それぞれの属する府県の専門職として、お互いのメンツや牽制も含みつつ、出会っていたと思う。

そんな事態が急速に変化してゆくのは、川畑隆君が発起人になって創刊した「児相の心理臨床」誌に負うところが大きい。

この雑誌は15号まで発刊され、リニューアルして又、「そだちと援助」誌として発行され続けたが、この間に阪神淡路大震災があって、大きな役割りを果たすことになった。

7/26 THU 受理判定処遇会議、月一度石坂、田辺両児童精神科医が同席する日。

登校拒否をしないでやっていけるようになった中三女子の希望の牧場体験実習を実現すべく、T市教育研究所のT川氏に骨を折ってもらっている。一人で12日間の旅に出かけられるかどうか、楽しみに根回しをしている。

京都府の児相に、常勤の児童精神科医はいない。囑託の精神科医は府立医大ルートでこちらの希望と関係なく、配置されてきていた。着任早々、子どもは見たことがありませんと告白する正直な医師もあった。

そんな経緯でケース会議に京大病院の石

坂医師が定例出席することになっていた。

先にも述べたこの少女、担当者として、彼女の夢を叶えるため、つてを探して北海道芽室町の酪農家に、何度も手紙を書いてホームステイさせてもらえる段取りをした。

そして何もかも整った出発直前、彼女は「行かない!」と言って断った。腹も立っただし残念だったが、これが彼女のその後の身の振り方には生かされたところがある。

7/27-29 FRI-SUN 広谷、飯田、川崎、私の中年川遊び隊で、今年の目的地、和歌山県の飛び地・北山村に行った。瀬八丁の上流で、昔筏流しをしていた人達が観光用に筏川下りをさせてくれる。予約時間に間に合うように、奈良県の山間部をひた走りに走った。

しかし、はじめの予定の筏下りコースをゴムボートでチャレンジする計画は、ボートをもって川に下ることが困難なため中止。そして次の予定地である十津川温泉の下湯へ向かって、川を眺めつつ走っていると、瀬八丁を遡るジェット船のことが浮かんた。「車を河口に置いて、ゴムボートを抱えてあの船に乗り、上流で降ろしてもらったら、そこから下れるぞ!」。

こうしてゴムボート河下りをした瀬峡は、流れの非常にいい川だった。最終便に乗ったことが結果的に、下ってくる観光船に迷惑かけることもなく、快調に流れを楽しめることになった。夕方の少し冷えてきた河面を、例によって流れのままに男4人が、2隻のボートで下るのだった。

この豊かな山間の地が2011年の台風、洪水で壊滅的打撃を受けて、今も避難所暮らしの住民が多くある。

あらゆるモノが変化することを肝に銘じて、今できることをするのが、今生きてい

る者の使命だと思う。

7/30 MON 面接を二つ済ませて、午後から福知山へ行った。秋の児相研セミナーでやってもらう基調公演のシナリオ原案の打ち合わせだ。「あらじん」という名の変った喫茶店で、5人でいろいろプランを練った。

児童相談qw所の一日を、ドラマ仕立てにして上演するプランだった。原案を私が書いて、脚色・シナリオ化を福知山児相の児童福祉司小巻さんが担当した。

できあがった脚本で出演者が何度か練習をした。この稽古も面白かった記憶があるが、私は出演しなかった。

そして本番当日、全国から集まった同業。同職者に、「ある児相の一日」の芝居を上演した。

あのシナリオは今でもどこかにあるのだろうか?

